



解國謠而爲諧焉者。維國
之諧。然而古之諧也。非諧
也。諧乎諧則今之諧已。雖
今之諧。又有侏離之諧。亦
銳於諧之諧。次而下也。吾
聞諧於我諧之師。師之言
云。諧則律也。則史也。則聖

人也。則赤子也。謂之滑稽。也。則滑稽矣。而不乎諧哉。予曰。與夫渾沌者之言。符符然也。俾渾沌之滑稽。而言之。果裂乎道者也。善矣。師老而欲無言。乃以律於諧。史於諧。述而存。而示世。

之侏離者。其爲蛻者。笑則師之道也。聖人之道也。赤子之道也。

寬延己月陽

源象輝



鳳岡
大字

ウツラ
鶴の串の路よゆふきれ為烟

あつゆ終年王孫し宅碧

楽天の身もくも乳^チさ^チい^チら淋し

途^チいで^チ床^チと^チ名^チと^チ富士^チ見^チ酒

雨あれ^チ庭^チを^チ志^チつ^チふ^チ月^チ和^チ電

白^チ及^チ摺^チの^チあ^チり^チれ^チ教^チ如^チし

古^チ御^チハ^チ概^チの本^チと^チそ^チも^チな^チら^チし^チた

千^チ鶴^チな^チの^チ名^チと^チそ^チも^チな^チら^チし^チた

か^チら^チひ^チ人^チを^チ稻^チ荷^チの^チ御^チ出^チと^チも^チ侍^チ王

ま^チの^チ價^チを^チ減^チは^チ花^チの^チ縁

と^チ終^チふ^チお^チと^チ水^チ化^チの^チ配^チし^チ黒^チ格^チ子

あ^チら^チど^チの^チ門^チは^チ冬^チを^チま^チし^チの^チ炭

新^チ川^チは^チ嬉^チし^チさ^チら^チる^チ月^チの^チ影

牛^チの^チ歩^チも^チよ^チら^チた^チ好^チき^チ道

二
旅ハ憂^{ウレ}生^ナきて阿^ア身^シも苦^クう売^ウ若^ニ

京^{キョウ}見^ミく^ク衣^イり^リ下^カま^マなる^ル旅^カ治^チ

孝^{コウ}經^{ケイ}を^ヲ並^ナハ^ハ揚^{ヨウ}屋^ウの^ノ遠^{トウ}ハ^ハ柳^ユ

八^{ハチ}十^{ジュウ}八^{ハチ}折^セる^ル雅^ヤう^ウか^カう^ウの^ノ路^ロ

縣^{ケン}木^キ掛^ケか^カう^ウく^ク木^キ赤^セ又^{マタ}花^ハハ^ハ咲^キ

繼^{ツグ}子^コき^キん^ンく^クと^ト紀^キ行^{コウ}委^イま^マ

宝^{ホウ}鐸^{トク}ハ^ハ造^{ゾウ}化^カの^ノ半^{ハン}め^メれ^レ持^チ持^チび^ビ

スミハ...
山...
ヒ...

頼^{タノ}む^ムと^ト領^{リョウ}中^{チュウ}の^ノ付^{ツキ}一^{イチ}山^{サン}伏^{フク}

兵^{ヘイ}庫^コよ^ヨハ^ハ忘^{ワシ}き^キ果^カる^ル兵^{ヘイ}庫^コ留^{リウ}

瞻^{テニス}の^ノ軒^{ケン}も^モ霄^{セウ}乃^ノ伴^{バン}立^{タチ}

月^{ツキ}ま^マげ^ゲも^モお^オぼ^ボん^ンや^ヤく^クと^トよ^ヨい^イ森^{シン}親^{シン}

志^シが^ガた^タど^ドと^トお^オぼ^ボん^ンの^ノ軒^{ケン}乃^ノ陰^{イン}

う^ウく^ク枯^コの^ノ中^{チュウ}又^{マタ}櫻^{オウ}も^モ打^ウま^マせ^セり

馬^{ウマ}隣^{リン}ハ^ハ絵^エを^ヲ文^{モン}字^ジを^ヲ解^{トク}も^モ如^ニ

惣^ウ御^ミ所^トよりくあ奴^ヌとて内^{ウチ}ま入
 御^ミの子^コを小^コ贖^{トク}う小^コ幼^コ布
 賣^ウき道^{ミチ}行^{ユク}日^ヒも切^キぬる折^セ々^々有^ア
 比^ヒ丘^ノ厄^ノとほ通^トう後^ノ妻^メ更^ニし
 侍^シ女^メり連^レ彈^ヒづけの扱^アり又^マも
 下^ゲ子^スハ邪^ヤ見^ミよ成^ニし虫^{ムシ}雨^{アメ}
 早^サ崎^{サキ}の橋^{ハシ}も海^{ウミ}へたを布^フ子^コ風^{カゼ}

文^{フミ}君^{キミ}かほる竹^{タケ}の鏡^{カガミ}音^ネ
 鏡^{カガミ}夜^ヨ小^コ追^ツきまきまの月^{ツキ}
 詞^{コト}の礼^レハ朱^ス之^ノ又^マ位^イ 響^{ヒコ}
 家^{イヘ}内^ノ此^{コノ}初^{ハジメ}遊^ユ祈^{イノチ}をふとびう
 うた方の敷^シ又^マ書^{カキ}入^ル籠^{カゴ}
 神^{カミ}事^{コト}能^ス儀^ス系^ス糸^{イト}とまてかきれ
 撮^トハ似^ニありだた大^{オホ}長^{ナガ}殿^{テン}

業平も川根片折よまがさぐら

雨よ流る池の氣をうし

宿川のうきハ其夜又清く元

指ハ切損ニ髪ハ又たび

けい止と宿小妻がよの出て

江戸ノ一里の國もまゝい

さくら咲きよを初めれ十二

物よこせかれ定心の葉柳

雲風小いさよハ胡馬れ招ん

老を呵責の服後たうらう

秋ぬといひさしともあふて

あふ石の初ハ月も古淵

七夕ふかし物ごみのうら

さやくるのハ後くよま

ワ
るさしれさハ遊カまき了カ郭カ一云

波ハくめと眉ミの出ニ来ニ一麦秋

豆中マ又尾上の種も吼ホるぬり

葉の種ハかどハのりハハニホカ種カ

十若れ君シあを下戸のおシちカた

うらウくクとト国三月

いイひヒさサまマまマ出デしシとト花の雪

ねネとトいイのノえエくク種シ浸シ萩の角

くクはハのノ音ネもモさサえエてテ難ナ波ハれレ思シ葉エ橋

葉ハまマのノ葉ハかカのノ店タはハ千チ瓦

五イ理リやヤ系ケ群ク集シの中ノもモあアおオて

秋アキ海棠カハハ膝ヒるルとト如ニ一

萩ハギのノ枝エのノ宿ヤをヲ出デるル物モノのノ月ツキ

涌ウめメせセ一ハ貴キらラえエのノ菊キクと

みくふをしど都の飛テし山

果の目よんく近チまらうらう

下チくのチり出立チ業百チ握チを

冬枯チ子たえのチ前所

白壁チれ中ふチ奈チりチのチ前壁

あチくチと通チるチ難チ刀チれチ蝶

かチきチまチもチあチるチ鷲チとチむチるチ物チ終

人チをチ丹チ青チともチあチるチぬチ茶チあチ梅

備チりチふチあチるチ打チ付チばチどチ笑チとチ去

ことチとチ春チとチやチとチ後チ家チのチ坊チ明

付チ置チせチばチあチ並チびチいチらチとチ串チ籠チ

法チ判チ押チるチ九チ吹チりチ出チる

若チきチ人チあチきチ身チをチ捨チ山チのチ秋チれチる

疎チきチ人チをチとチ同チ一チ柿チ年

鏡ウ又くうぢはく中ふニシ虹フナハ

あフケへまハ勢フケば常フケて三フケツ毫

勢フケ冒フケふはまフケくフケ減フケりフケ行フケ並フケ本フケ松

質ニセの付ニセ申ニセるニセ耶カシ那カシの柔カシ屋カシ

凱カキ歌カキ中カキかカキさカキくカキ一カキまカキむカキ薩カキ芝カキ居カキ

疑ウタガハシク
疑ウタガハシハのウタガハシ後ウタガハシリ

炬トモシカス火トモシカス売トモシカスりトモシカス一トモシカスよトモシカスとトモシカスりトモシカスこトモシカスとトモシカス治トモシカス

父トモシカスよりトモシカスとトモシカス長トモシカスくトモシカス若トモシカスかりトモシカスにトモシカスとトモシカス花トモシカス衣トモシカス

美トモシカス妻トモシカスのトモシカス際トモシカス北トモシカス出トモシカスるトモシカス八トモシカスツ晴トモシカス

龍潜問答 業老又布門述

○物皆神わると雨ウツ何ナニりて始ハジメと成ナリと十七ナナ文フミまの
詞コトの中ナカよ季キと切キ字ジをシ入イく一ヒト奉ホウのノ教キョウ向キョウとト成ナリる
自ミ然ゼンれ理リゆユく不フ易イの提テイ好コウりリ難ナンのノ委イ白ハク
かカどドと云イるル中ナカのノ改カイ而ニシテおオちチたタりリ好コウるル志シるルをシ秘ヒ書ショふ
作サク例レイるルなナとトいイはハぬヌ奥ウチ儀ギをシ知チるルさサらラ若ニシ乃ハ
迷マヨひヒかカりリ若ニシ婦フよヨ者シヤともトモ其ソノ向キョウとト他タ老ロウよヨうウて
一ヒト日ニチのノ論ロンぬヌとト控コウふフハハあアらラじジとト控コウふフハハ一ヒト若ニシもモ

季と切字如くてハ奈句よ此後と此定まきし
 ○服ハ動むら文字あきまじる様なり故又まきり
 まりなり ありまじるなりは動むらま
 めくまじると定まらるよ海意あねなり
 密子あひてあまへー

○第三六てふらんまきー かくれどく
 まじり句法如く此句の外よまじる事
 此よりかたむらぬと能中てとめと定法とあ

あー 但字とめと云ハ貞徳翁稀の才三よ
 去の末天下よ名おれ郭公け句と此例として
 りおぬむ若秘事習ひぬぐいア其おひせ
 云ハ春霞 杜若 初風 枯柳などまじる候なり
 志く程ども好むるゆかり貞徳とまじる兼相と
 いふ句ー 明心居士後悔せし終へー
 ○四句めハまきりまきり かりふ極てまじらふと
 んゆらるる為あなりまきりまきりハまじり句め

あつとて一向をやらざる不修のりし但し句
め小船を忘るり古実なり

○第三の外ふてとめを嫌ふとらより一向論
ずるふやとら安説なり長句乃てとら三句
偏くいつてもとら一む表八句の由よてそ先
二ふあつととらとら一いつは但昔にてそまの
折合前後を替めらるふを以下の句をとり
折合を嫌ふり古法を乱る程藉といふも

去嫌の安きよ飽く回志とる者多し

○月の影と下ふそよりおひなぐていそあざらるり
かり句法予が百韻の中よあつとらとら

○歳旦とつたの第三は近年神祇意と名取
なごと出はるり何者おひいびとらとつた表よ
あつと唯とつたあしとらよお好まじいやらの
句を作さしてもとら一いつはとらと未煉の
作若くそふおひて釋教無常迷懐哀傷

或ハ當時在世の人をまじくして憚らざるは述
作をぬるの小某ぬ年流の神古様を歌よ
たすどもとさくかきと神代とく起るる防ぐ
なまかたしハ所謂之の物ハ新年と書きし者
をも祝ひて身身体を喜びてとて九と表さる
此礼式嚴重の儀なり争を法を礼との
まえ何らんや他のいふ如くありまゝ正儀
をそと弁えは用らるる口惜きる也奥儀を

おひぬく類さるる如く昔或宗道二つ物の
中ニ小一と出らるるを正と起るるの如く
十通ハ別よあり何る中一あり格式よハ起と
儀と表のいふと起るる也

◎花小梅を付るるの右の梅とて一といふ
その外を付格あるといふもおひて蓋好ま
るがればこそは誠実或ハ前句よ一真付の
中ると云ふ句よ又ハ起つじは秀句なりといふ

ゆねもつらんさふあつげーて唯付こゝを想ひ
 くるまのつれ自傍聲とつらんこゝろはなき月の
 事からまふ詮花不揚を付ぬともも事れ
 欠らあしもあつげ被は法友とちうて付ざら
 人と此後のおあうとらふあー

○或人問云正花のつらう小桜の白とせし卷
 あまうねのつらうのよは惟や答云正花の
 能道一々の秘改めし容易の論はあつげ

あうねふま^キあ^キな^キなどの妾説をまうどして
 何のよれたま人もぬく用りし浅ました事
 なり鶴れ中をまうたるべし—まをまを
 ゆうはねて河あふ溺あを

○祝儀のあ向小連^{レシニシヤウ}声とまのつらう五七五の
 流れたまお通よすらるるあをまを

積雪や松はらふさき色なを—
 かくれごとくにるわう凶れよま又七五乃

な^ウ新^ウと秋の暮を町にけり 婆東

婦^ウ嫁^ウと秋ハ妹^ウり 老^ウ、

首^ウさる^ウ又^ウ愧^ウくも身^ウはうろ^ウええ^ウ方^ウ紫

傘^ウ一^ウし^ウて^ウぞん^ウが^ウ藤^ウ刀^ウ、

伊^ウ万^ウ里^ウ焼^ウ産^ウよ^ウ砂^ウの^ウろ^ウまり^ウほ^ウろ^ウん

卯^ウ月の籠^ウ籠^ウ独^ウ活^ウの^ウ吸^ウ口^ウ、

上^ウ方^ウよ^ウ摺^ウき^ウあ^ウ新^ウと^ウ極^ウれ^ウ又^ウ 婆東

掃^ウき^ウく^ウハ^ウ世^ウよ^ウ床^ウ新^ウ實^ウ秘^ウ、

吉原の^ウ一^ウ軒^ウ先祖^ウ乃^ウら^ウと^ウ姓^ウ経^ウ、

小^ウ町^ウの^ウあ^ウて^ウり^ウ名^ウ月^ウも^ウ降^ウ、

そ^ウく^ウい^ウ出^ウ海^ウ舟^ウき^ウき^ウと^ウ粟^ウの^ウ虫^ウ 方^ウ紫

櫓^ウの^ウ暮^ウて^ウう^ウと^ウ秋^ウ門^ウり^ウ味^ウ、

廿^ウ五^ウ何^ウると^ウな^ウた^ウハ^ウゆ^ウ六^ウの^ウ昔^ウ六^ウの^ウ、

吟^ウ新^ウあ^ウは^ウ飛^ウも^ウ三^ウ年^ウ 婆東

氣^ウ遠^ウい^ウよ^ウ成^ウく^ウ尺^ウ上^ウ一^ウ何^ウは^ウと^ウ、

恋^ウ慕^ウの^ウ園^ウハ^ウ日^ウ新^ウ両^ウを^ウゆ^ウた^ウ 方^ウ紫

塚穴又修る時代ハたそひ死 方照

播川の傍れ白い巾着

袂を針夏至と子よのあねいし終

岸の中ハ此石よ赤書 婆束

船の舵ハミ如密後乃舵の定る

縛屋ウカミミ 蟻ウウ裏 方照

昔の月落美ハ出く 總仕舞

ゆゑぬふ知るう 雷國の銀 婆束

時々ウ小妻れきくこれひや一抱

周果れも一免ん夏う合四十一

ねくろふなハ又付てもスをぬさ 方照

満腹 暫時 光陰乃 彫

土田共吉野の地名田花の志ぬさ小服ニキくひて 婆束

結くて目出度き柳の髪 執筆

歌仙

長き旅や音羽の御に響く五葉坂 北其

月の御にさけ給ふ推乃裾すそ

行ゆ坂ハ立た秋あきよりも月つきよ立たく

於お字じ小こ續つ君きみの代しろの市いち

早はや敷しの瀬せよ幸さいさしの小こ籠かご母はは

ちちりりけけーー巻まききのの一ひと雨あめ

若わききて二ふた三さん年ねん頃ころ新あらた在あ家いへ

事こと一ひと獨ひとりひと来きく嫁よめ入い皆みな延のび

薙は刀たのの髻こ古ふるのの儘ままれれううるる草くさ

竹たけ此こゝ部ぶ踏ふ稀まれ不ふ板いた浪なみ

比ひ眠ねくく脊せもも形かたちくくなりなりしし冬ふゆのの竹たけ

おおししててつつつつそそ来きるる梅うめ廻まわ

立た身みの人ひと旅たびかかおおへへおお石いし枕まくら終は

朝あ日ひつつめめくく柳やなぎ花はな乃の味あじ

君は市の松北上峰端のるる
涙ナミダかくはは涙ナミダ縁エ糸イトうううた
宮ミヤ能ノ乃ノ融トクさかしく昔の月
綿ワタうらうら積ツクく秋を寄る松
滋ニ柿ツツミハ疎ツツミとあそぶ谷ヤりあ
あねあそびしてあそぶ村の先生
春のきよき世の娘メグあそぶ二階の燈
又もおこさばこはいえ 竹

友橋乃裏も入日よめうと坊
春のむらさきうら積ツクく人
賣ウしてあそぶ牡丹畑へ纏セあせ
微ミ塵チも似ニたあそびて代役
山伏小隠コカクれうけるあそびし
西を移シひ徳トクふ髪カミ町
名ナるも園エンありそハ意イの園
河カ原ハラもそとよあそびし

おつち糖ハ湯ハ版ハも尺ハおとハ糖
糖ハ小ハかハきハあハよハけるハむハくハ雨
おハくハ又ハキハ物ハ進ハ性ハ續ハ終ハくハ
むハくハハハるハもハはハかハつハるハ糖ハ子
糖ハ出ハくハくハ花ハのハ海ハをハ踏ハき
はるハ去ハのハ物ハ空ハをハハハはハるハ糖ハ

歌仙

切ハ株ハのハ雨ハあハきハくハくハ虫ハのハ声ハ 乙栗
捨ハくハ園ハのハ骨ハをハ梭ハ摺ハ乃ハ茶ハ 紋苺
元ハ山ハのハ何ハのハ苦ハもハぬハくハ月ハ入ハくハ
絵ハおハいハかハきハぬハかハとハ風ハ吹ハくハ 乙栗
あハくハくハ遠ハくハ遠ハくハ友ハをハさハ 乙栗
琴ハのハ埃ハ掃ハくハもハもハあハ 紋苺

袖^ウの腕^{ウデ}は四^ヨ——蒲^{カサ}筵^シ 紋^{モノ}苜^{モウ}

そは^{ソハ}口^{クチ}後^{ノチ}あ^ア山^{ヤマ}と吹^{フク}浪^{なみ}を 乙^ニ栗^栗

先^マへ^ヘ勝^{カチ}り^リ子^コと^トを^ヲう^ウハ^ハ嫁^{ヨメ}も^モ知^チ

う^ウら^ラよ^ヨう^ウう^ウ移^{ウツ}ぬ^ヌ龜^{カメ}の^ノ後^{ノチ}の^ノ脚^{カド}

羊^{ヒツ}養^{ヤウ}が^ガ脛^{シネ}の^ノ骨^{ハネ}う^ウち^チの^ノ皮^カ 紋^{モノ}苜^{モウ}

直^ナ一^{イツ}一^{イツ} 鳥^{トリ}か^カと^トお^オ醉^{サケ}醒^{サマ}

名^ナ月^{ツキ}は^ハ詠^{エイ}ゆ^ユ常^{トコ}ハ^ハ尻^{シラ}へ^ヘぬ^ヌけ 乙^ニ栗^栗

釣^{ツリ}瓶^{ビン}を^ヲ縄^{ナヒ}乃^ノ高^{タカ}も^モ秋^{アキ}情^{ナヒ}

石^{イシ}の^ノ夢^{ユメ}中^{ナカ}の^ノあ^アを^ヲ亭^{テイ}の^ノき^キ取^{トル}鑑^{カミ} 紋^{モノ}苜^{モウ}

お^オう^ウ根^ネを^ヲ花^{ハナ}と^トゆ^ユら^ラ裏^{ウラ}を^ヲ

船^{フネ}ひ^ヒく^クう^ウす^スむ^ムを^ヲ花^{ハナ}の^ノ相^{アイ}廻^{マヒ}

お^オん^ンち^チや^ヤん^ンし^シて^テも^モ汲^ヒま^マさ^サる^ル點^{テン}

換^カ売^ウハ^ハ灸^シの^ノこ^コこ^コ 暎^キ日^{ニチ}巻^{マキ} 乙^ニ栗^栗

一^{イツ}下^ゲ財^{サイ}う^ウか^カう^ウぬ^ヌ洞^{ドウ}の^ノ夕^{セキ}帚^シ

天^{テン}狗^コ風^{フウ}は^ハ押^{オシ}の^ノあ^アう^ウま^マし^シ一^{イツ}夢^{ユメ}の^ノ凡^{ボウ} 紋^{モノ}苜^{モウ}

さ^サら^ラゆ^ユら^ラは^ハ似^ニと^ト笑^{ウラ}れ^レ横^{ヨコ}顔^{ガン}

第へ又さしこめて盡き使者より乙栗

脊セ高タカ如ニ女メあまそうく深コひ負ヘ

平判ヘイハン登世トウセイの魂タマシとさうさげと

長居チカイり代カタる長チカ居イと改カ下カ

和ワ岐キのやヤぬ天アメ定マて乃ナ具ク好コ 紋モン苜モク

淨ジヨウ弘コウ借カ様サマちと肥マし修シユ又マタ坊ボウ

魚イサ乃ナ月ツキ筆ヒツよ飢ウるケきキうウくクに

秣モク年ネン一イチ交カウ新シン曾ソウ我ガの權ケン乙栗

酒サケくクされサレ然シカれレ多タきキ踊マるルて

長チカハハあアきキとトのノせセてテ流リウるル

むムしシくとト雲クモのノ御ミ足タるル後ノチのノ朝アサ 紋モン苜モク

瓜ウリ豆マメうウりリとトのノ日ヒちチきキるル

ふフれレ以モ争ソウをヲ片カタまマよヨ深コ山ヤマ宮ミヤ 春ハル曉キョウ

艱ケンがガ為ナあアきキさサうウたタのノまマ 執シツ筆ヒツ

歌仙

六十一歳も昔なれハ、

新平やおれの表裏うのり
 管之
 一艘も来はしお新川
 婆東
 いさきよたの瀬乃腰折多
 是中
 低ふと室月れお山
 沖虹
 刈捨さ州よりの海虫も考
 婆東
 片まんできりつけの神戸
 管之

沖あけのまきさるハおの伯刺之
 沖虹
 二三里坊と強んを出来
 是中
 かくき家ハ屏風う浦乃恋衣
 管之
 石あをぢうは来よるのて藤
 婆東
 作ら枝の天理へりぐるまの茶り
 是中
 愛世の思さめ及抱ちん下
 沖虹
 亥のおお版くハぬ人通
 婆東
 赤兵つめ尺裁して投おぬ長
 管之

ヨリ上元

花と雲を繋ぐ糸をまきまきして 沖虹

菴イハりむとへハ解トケ 神カミの雲 是中

月ツキ 飛トビけく 鳴ナリ ける 老オシ 吟イ 管之

深山おろし 小いざる 砂舟 婆束

志シ けり ちんら げ 賢ケシ 子コ かえり 是中

木キ と ちんら けり けり 神カミ 木 沖虹

空ソラ 天テン 小おとろし けり 急イサ 干カン なり 婆束

あぶ 口の いと 細い 糸 管之

角ツノ 二ニ へ へ 仙セ 家カ も 追オ 出デ けり 沖虹

ふと せく 仮カ 名ナ の 雀スズメ けり 是中

撞ツキ 控コ の う けり けり 又 極キョク 志シ ちんら 管之

佛ブツ も 背セ 中チュウ へ ちんら 婆束

浪ナミ と 出デ けり 糸イト を 目メ 刺シ けり 懐モ 是 中

言コト 洲ス の 所トコロ へ 飛トビ けり 蓮レン の 雲 沖虹

秋アキ と して 男オトコ と 志シ けり ちんら けり 婆束

かる へ 糸イト を ちんら けり 管之

菜板のけさささ免ぬ百年忘 沖虹
 んれ自由る事不常生 是中
 ち福つるべ名とけて後ハ雪乃尺 管之
 寺のよごせし 寺忠解花 婆束
 雲 龍れとくぬぬぎ登橋 是中
 風をおよよきき 蕪山 執筆

歌仙

夕 窓をば朝も日月の集あう如 文風
 日 出さくお入 初秋卯花 婆束
 菜 階より角折の歩き 春上る人 椿同
 絵ハ 弦の具かどむさした谷あり 文風
 い さよひれ名おも持し 西氣よ入 婆束
 名 あ終虫も秋あり 唱 椿同

斤^ク又世ハ物きく白なる茶^カ鷄^ニ 文風

侍女をのりて^ニ新法^ニ所

愚さを隠さん^ニ為乃^ニ舞を^ニ 婆東

海と^ニる^ニ合と^ニ晴と^ニる^ニ空

浅^ク一^ニる^ニ肝ハ念^ニ子^ニ癩ハ^ニ落 楮同

之興寺^ニと^ニ定^ニ況^ニく^ニ塔

騎^リ虫の^ニ隈^ニより^ニ下^ニタ^ニ一^ニ里^ニ塔 文風

目^ニ比^ニ結^ニより^ニ一^ニ極^ニの^ニ之^ニる^ニ地

ケユラビくト云テ子共ヲ
ヲトスコアリ台カレニ
化カシメルコアリシヨリカ
ニ興寺ニ建ルト云アリ

約^ク障^ニハ^ニか^ニす^ニの^ニ小^ニ御^ニ者^ニく^ニ為^ニ一^ニ水 婆東

柿^ニち^ニを^ニの^ニて^ニ無^ニ念^ニく^ニ深

諸^ニ必^ニ餐^ニ納^ニは^ニ利^ニ持^ニ花^ニを^ニ後^ニも 楮同

占^ラよ^ニ事^ニを^ニさ^ニす^ニと^ニ榮^ニり^ニと^ニう

借^キ前^ニよ^ニむ^ニと^ニう^ニれ^ニ孔^ニ一^ニ奴^ニ鳳^ニ中^ニ 文風

言^ニ向^ニよ^ニと^ニた^ニる^ニと^ニ當^ニる^ニ誠^ニ解^ニる

裏^ニ皮^ニ小^ニ紙^ニや^ニる^ニと^ニう^ニて^ニ神^ニ宗^ニを^ニ来^ニ 楮同

一^ニ字^ニも^ニ讀^ニま^ニじ^ニ世^ニと^ニ隔^ニる^ニ富

雨の日に時雨の亭もたりしるい 婆東

百夜の際て百夜只脱カむ

罪深く女の息もはやま物 文風

ふあをえんく船もろさめ

津をすきむきくと砂捲掌 楳岡

板橋を折折く夕月

二町つゝあふく掛よ田種あ 婆東

年終る程ハ怖うない岩

又^ク人カみきみ純心の人と成 文風

お惚^{ホレ}と見えぬ^{ホレ}嬢^{シヤウ}り夏

白河の関とけりど急や川を 楳岡

陰^{カゲ}ちど懐^{ナツ}も突^{ツキ}おひらう

生^{ナマ}毫^コもむれ群集よ千阿うて 婆東

永き日陽よおぬ子傳^{モリ}等^ラ 執業

歌仙

卯の花ハ暑さ始の雪見哉 定主

之扇又載セー振リーき巻 青牛

鼻此下ナクても痔ハ子路路々 才婆

世を流るハぬ次女 葯弱 定主

リ名くをよごして走るちきき 青牛

深山ナレとも穉極の蘭 才婆

大^ワ洋陰を流る屏風秋意し 定主

うら生強あま尻を叩く 青牛

関破くゆずりあし留ー小豆脍 才婆

上代小経きまろふ袖 定主

看^{カミ}病小座くー星の若七杯へ 青牛

新^ニさーて讀む若花たの状 才婆

敵をは討^{ツク}る後の春を物心 定主

はくろひ課^{コウ}セ物と夕月

裏付居栴檀の尻く鉄砲壺 青牛

片の書とれたる 龜一本

八朔の風は仕組の花もらる 才婆

山くと深 露田 姥 薺

挽^ニ売れ立ういもぬく及さびて 定主

遠州^ニ行^カ燈^トて送る 波一 場 青牛

を^レ箱ハ^レ箱^ニ百か^レう^レ 滑^ル矢^ノ娘 才婆

想^ハ花^ノの時^ノ雨^ノ方^ノど^レけ^レが^レ換^ル 定主

漏^ル層^ノく^レ

一^群子^ノ牧^ノの^レ箱^ノお^レ登^ル上^ル 青牛

お^レ子^ノの^レ容^ノ紙^ノ被^レぬ^ル箱^ノ 才婆

又^レう^レけ^レよ^レハ^レ安^ノ方^ノと^レ知^ルに^レ意^ノけ^レう^レ 定主

あ^レま^レく^レも^レほ^レの^レお^レい^レ指^ノ箱^ノ 青牛

月^ノハ^レ文^ノ料^ノ 又^レ登^ルハ^レ香^ノ壽^ノ丸^ノ 才婆

金^ノ魚^ノの^レあ^レも^レ溜^ル白^ノう^レ箱^ノ 定主

法^ノ祈^ノの^レ襟^ノお^レと^レう^レく^レを^レ隣^ノ 青牛

茶^ノハ^レ酒^ノ臭^ノく^レ来^ルつ^テ遷^ル宮^ノ 才婆

炎天ウ小文ウくることく 毛ウ 暇ウ 定主ウ

ちりー ちり小笑ハ ちり公事 青牛

南無河海陀南無河海ウ ぶと麻ウ 才婆

依ミの林ミ又ミ白ミ波ミ
たうまれ 美ミの香ミ石ミ

ふとウ呼ウ巾ウ裏ウの立ウ場ウハ嫁ウ啼ウき 青牛

又ウ神ウくまウくるるウるウらウきウくウらウた 才婆

歌仙 漢和

匹ウ 卷ウ 而ウ 懷ウ 糞ウ 朶ウ 輝

まゝウ去ウナウぬウやウ草ウ薙ウ買ウ舟ウ 婆ウ未ウ
維ウ京ウハウ胡ウよウ切ウくウ流ウ香ウをウるウく

依ウ母ウをウ守ウ人ウよウくウくウもウ廻ウん

蕉ウ 桂ウ 男ウ 稱ウ 琢ウ 入ウ 朶ウ 輝
蕉ウ女ウ 茂ウ 縫ウ 雷ウ

三階ワふあけい峠の推園 婆東

〜の救り 君りむ

竝ナラビ枕マクラ 交マドノ本モトカ 朶輝

世よ昔ハ強タカ江加岸川の漚アワ 婆東

極ツギふの強小鏡あのおまこお

驛アカウシテ旦ニタ 角ツノアラハ徒ス驕ムシ 朶輝

齧ハガメメ日ヒ 染モチ花ハナ 夏ナツ

醒ヨヒサメ朝アサ 竹タケ葉ハ 秋アキ

薇ワズビ拳ニキワテ 焉ナ 不ズ慾ヨクナラ

柳ヤナギ倒ユケル也ハ 如ゴトシ柔ヤハラ

二日後雨ふくまじし 猶ナほもろ 婆東

骨ハネれ片足の下結り流る

物モノ彷彿塚所をきこなぐ

後ノチも均ヒトシ強タカ大破の越

帶オビ脱ハキ 弦ツル弓ユミ 臥シ 朶輝

佛ハツ程ハダカ 木キ 偶カウノ 箇カシラ

縁ヘリ 縁ヘリ

唇^シ蕙^イの^ハか^ハ去^イこ^イの時^リ去^ニ 婆^東

能^イ蕙^云き^ク皆^さが^ク囚^ト

大^{タイ}一^レ錢^{セン} 難^ガ 協^カ 小^セ 輝^輝

握^ニ一^レ墨^ズ 外^ゲ 三^ミ 游^ユ

目^メ去^コふ^ハな^カと^クなる^ト傾^カよ^テ 婆^東

シ^テワ^キの^声と^クお^ハ萩^萩

鯖^サ一^レ生^{セイ} 疎^ソ 已^イ 契^キ 采^輝

龜^イ一^レ殺^{コロ} 益^イ 其^キ 雙^{ソウ}

同^ウい^ハお^ハ照^シり^ハけ^ルを^シ怒^イふ^ハ猿^猿衣^衣 婆^東

鳥^ト一^レ井^イ 井^イ 無^ム 頭^カ 采^輝

茂^シ一^レ助^ス 蒼^{ソウ} 戩^{セン} 號^{ケウ}

公^キ一^レ光^{クワ} 藻^{ソウ} 融^{ジュウ} 由^ユ

お^ハこ^ハ吞^トま^ハ爰^ニは^ニ森^シ花^ハの^ハ供^ケ也^ト 婆^東

損^シと^ハお^ハこ^ハな^カら^ズ 夜^ヤ 鳩^ト 執^シ筆^{ヒツ}

歌仙

和夏の一章を綴りて
三十一の五十一の字を述ゆぬ

路くの勤さうや夏未立 蟻同

こま日よ造新り虫の顔 婆東

井戸水とてふ小舟漕出く 蟻同

夜しこよ白て来ふ鶴 蟻同

桂男ハ杉や定宿たうぬらん 婆東

負けと兼とも初くはる雲 婆東

大板乃秋吹ぬもる厄り崎 蟻同

重れお好ふ元山まら池 蟻同

根く通陽くもきう九十九花 蟻同

懶き通の虫抽縮乃星 蟻同

いひ出たは皆蒼く去る百年忌 婆東

況けハ就新屋とたうりう 蟻同

引れ名も満くおる見えまの位 蟻同

薊り通り顔色お地強 蟻同

裸ハダカ身ミへりふま風カゼの吹フれさめ 婆ハハ東ト

女メ乃ナ高タカ向ムカ目メ又マタ見ミるる

哀アハレ小コあき果ツキるる何ナニれとと山ヤマ 蟻アリ同ト

宴ウツも掃ハぬいさうてき虫ムシ付ツ

戴イくくハハめきさうなるなる濱ハマ相ア 婆ハハ東ト

江戸エドへ流ナれる事コトの夜ヨの立タ後ノチ

老オシくくええええるるをを後ノチ世ヨの志シももしめ 蟻アリ同ト

生ナき通トーーめめくく獲トきき籠カゴま

景ケイ清セイも小コ町チヨウもと合アいい景ケイのの時トキ 婆ハハ東ト

解ト指サののどどささくくささよよ妾メカ入イき

善ヨシるる目メの情ナリささきき髪カミれれ孫ムス心ココロ 蟻アリ同ト

目メ出デ度タク柳ヤナギくく船フネ新ニくくぬぬふ

くくううづづううよよいいほほととかかききううのの神カミ馬ウマちち 婆ハハ東ト

風カゼ乃ナままてて来キるる海ウミつつななくくる

抱エかか新ニももくく海ウミとと近チカてて目メをを入イ 蟻アリ同ト

金カネ将マサりり喜ヨシああううててるる足タビ

まらざんり侍女の出於大倉屋 婆東

あここの様給ひ武士よむ立

罷他るるも好き程のいれしさ 蟻同

近石て色そのき沖石

花うが中かきのよほる川も種 婆東

一椀 飛へた二椀とびはき 執筆

詠物回答 葉老父存門述

○或人云高僧の愛句多く中そがさる我
ども不才なる故物十し其中は先師の
坊れ十七年忌を嘗みする以京都の老龍より
懐旧の愛句を贈りしころ其詞守まきせん
十七そり此名をうたひし法海の年数を扱ひ
あハ勢きむしきあり吉首社もつゝまの月
と何る城くうへて吟どねも中うえさきは

又して此句意を尋ぐる小具反音もまた古
首座の東福寺の僧林道春の才かり十七
歳少して死はる時のよきと歌のよう奇矣
此の如うかくのごとくいひ誠と道中を
おきて沈吟と移やもろく守えはれは
採花穂香しく弘安は供えをぬて海も
難治せしむべし予が云 勉むわぬるを
とるよき分て他とる愛句にかねば固えぬ

この如うは種々國人の科よあるは作者の
未練なり故あり上も此愛句はよく守り
りのたるを考へて守りえぬた句何のいさ
耳のたよりむらりし昔連歌の名句よ
面影のふれ嵐やちとさきほ
み難く守りた愛句なり能くわづらひ事
賞吟すべし

○裏白の連歌詠法は昔例ありて格別の

儀也追善追悔の要句を修る不經毋致
 逆ありて又ハ懐帛などを裏反して徳を
 り其謂かりたるりかるとちの通るよ甚べ
 せ送るの於籠持小例まべりて

○吉禮凶礼はよろも他へ祭向を勝るよハ時のま
 ぶつて或ハ遠来の臨相もも者出まゝてお添
 相る也とせよより貧者たぐへい金銀をつら
 ぬと愛向だるりと勝るり冷どきことぞん

おとりのまことさありの無種といふおは
 高時の徳士中一少ありだきさるりゆき

○門人問云宗周の徳行ハ重頼よりはるま
 せりよりいふ人何とた格や修や答云西山
 宗周梅翁と号は連歎の宗匠少く大坂天福小
 徳を徳とふもは連歎ハ善ハ徳行ハ凡祈わく
 来り徳ハ門人等すゑて徳階一流を具陸あり
 きると海陸の徳士競ひあて門人入輩多し前川

由平松壽朝西齋一時新惟中其中心の委
中るもの如く松永貞徳翁の言才松江守親
也後惟舟といひ此人梅翁の風を志す
来々親を厚くうらなはれ貞徳翁の流士等憤り
喚つて云惟舟いばよく生れんと云ひ八旬有
りたふびて西山の寺へ志す然と離傍部しる
そはの流舟ふある僕も先流の抽物小舟の
底小孩きく他門の僻るの制し難し一
家

家の事一々くるるを求て仮も得へるが

○ 近き頃の流席は浮船といふ事と云ふ事よ出せり
其謂なるより月日づつ但日本記仲良天皇

卷ニ夏六月海郷醉而海上は浮るはつたれ
るを見て刃控をきびいひ出はるべし

○ 黒餅 コクモチ 子を丸をえたる御方きびいひぬま
るぬり石勝がごとく中文字と云ふはし

○ 贈軒 ナニスノケニ 或書云細切為贈大切為軒と云ふ見

字 款字と昔人から共々用ひべうべ

○ 絹布の鳴法本の箱國より織出はるのち

箱の字を用ひべう

○ 煤木 在途の脊戸口又ハ堤の後がこふ心なをま

て格のこく菓を積上く菓の料小貯えを

新をらんけもくすきこくハ山を小まなを

煤木をせせり新くまふ比くする石

歌仙 独吟

日此矢射り汝干れ舐や清路鳴 如山

素のく移り南のく西

系於ぬ 藤中 花よものうらん

出くものんぬ正並の智恵

深きくよあやう 粒く月よ出

さも ぬらうらう 傘の又字

清貧ハ名子ハ世世ハ富貴ナリ

知ツテハ能イト云ハ知リナリ

いふ事ハはらわはぬけぬ事子の壺

思案どてと家桶の掃れをせ

似城も流き多く六玉川

月と契^{キキ}事と隣^{ナリ}事と事なり

得先の鷹ハさもぬく席の秋

新波てんてんてんてんてん

廊^ワノ氣の控^カ部^ブてるハも子

不

と川ともく免^メ繼^ツ母^ハ子^ハ儂

音^ネちして神^{カミ}お掃^ハふとわれ又

あ子^コ振^ヒ林^ハちとやぬるも

清^ス机^ツの遠^トの花^ハ咲^キきの上

毛^モ毳^ヒお二^ニ重^シ云^ハの野^ノハ群^ル

歌仙 独吟

やまゆふや若おのり路のゝ後 壽山

濁^メと^クを拂^フふ去^ク風

呉^レ服^ガそり^テ君^ノ服^ヲ誘^ハひ暖^ム子^ノ

世^ハ一^ニ云^フ子^ノ抽^キ多^ク損^シ益^ヲ

夢^ガ深^クハ月^ヲを^シて^ハ乃^ハ以^テ糸^ヲを^シり

を^シれ^ル魂^ノ乃^ハ者^ハれ^ト一^ニり

徳^ノのく^レは^ハ必^ズの小^ノ隅^ニ乃^ハ照^ルみ^タ美

去^レハ^ハ舞^子ハ^ハち^ハき^ハぬ^ル秋^ハは^ハ何

く^レぐ^レて^ハむ^シと^ハ課^セる^ハ結^ハひ^ハ思^ハ布

葉^ノ日^ノの^ハ舞^ハひ^ハれ^ハ路^ヲを^シ越^ス風

呼^ブ声^ノの中^ニは^ハ着^キ入^リ舞^ハ交^ハ仕^ハ

魚^ノれ^ハ其^ノ女^ノの^ハま^ハき^ハこ^ハえ^ハ涅^ハ繁^ハ會^ハ

馬^ノこ^ノ乃^ハや^ハさ^ハや^ハ大^ハ系^ノの^ハ花^ノ々^ハげ

志^ノり^ハ月^ヲを^シ閑^ニよ^クあ^ハり^ハか^ハつ^ハき

男とちるんもあてあおも好
 西スイ氏ウヂ シラヒひのあき 山ヤマ伏フシ
 豆マメのうら^と連ツラシとも別キタき際
 こぢぢをからくうのあぢぢぢぢ
 さぢくはぢぢとちぢぢぢの浦
 之ノ又マタ十八ハチジウそこが縁ヰづく
 乃ノ知チるべぢぢの物モノ乃ノ結ムスび紙
 所トコロ寺テラの名ナを呼ヨつ曉トキの種タネ

去クの雪ユキハ化トもあもさうの衣イ
 纏ツト ツトま ツトわ ツトち ツト月ツキ影カゲ
 長ナガ活キツクるあお生ナマくする玉タマ粒リツ
 着キるの事コトあはるる衣イ考カウぶ
 着キるあお大オホ和ワもあこし打ウ浦ウラへ
 かーはあははわ杜ト々トのさ
 着キて着キる地チ獄ゴクの中ナカもあはる
 狗イヌく見てあはる眼メて字ジてあはる

イリナカ

典葉のユまれ付ー相聞哥 竹翠

くつろまらりお侍女の乳母

修羅乃二々季勅て人らーた 其冬

直森の顔よ直森とる蠟

降こやう橋よ凍ーき下結の音 波東

ふと喧嘩ーて百あゆの籠

髪金の九十一お月かあろ 竹翠

酒臭いのが云ひまけの程

再^ウ送^{トク}才^{トク}程ふ唐きハ文^フ沙^サ計^ケ 其冬

素とえゆお小る浪の裏

ふみハくばあまハ信^シこ^コづ 竹翠

どろよあこふとあまの魂

花の妻人も羅弟乃其の歌 波東

何^ニ乃^ノ後^ノそ^ソ雲^ノよ^ヨ入^ル鳥 執筆

葉 四十三

歌仙 独吟

清いしきのけてる花屋の櫛代 寒白

振るきこるりもまゝこゝまゝ

神とのと海なき西の海音買て

弦へいほとけ風をとりりり

ぬけぬるゝ寝と本一月の蝕

踊る果るゝ秋の山さおき

漆かく業止るうり山のさ

お忘きよく老をさきよ

半まつ榎の傍正乃人きこ

茶毗の席よ牛の壺もでた

落さしきの漏を極る果しかなよ

梅雨れ舞乃ふとあま

郭へ云物な劣り 暮るひ日

龍身の耳を川も恋ある

手家し
生田伊村宛
小塚相房ノ
アワレナリ

前の世で惚^{おレ}惚^{おレ}報^{はつと}のさくぬ^ぬよ
 霜乃^{しも}乃^の志^しろ^ろき^きも^もう^うつ^つる^る房^{ぼう}の^の肌^{はだ}
 庭^{にわ}ひ^ひる^る皆^{みな}洛^{らく}外^{がい}を^を京^{きやう}水^{みづ}邊^へや
 物^{もの}々^々の^のさ^さあ^あり^り随^{ずい}次^じ皆^{みな}是^{こゝ}る^る
 二
 か^かう^う一^{いっ}流^{りゅう}云^いの^のう^う一^{いっ}流^{りゅう}を^をあ^あて^ても^もた^たく
 志^しえ^えを^を一^{いっ}見^みハ^ハ相^あ子^こ板^{いた}て^て釘^{くわい}
 唯^{ただ}壹^{いつ}の^の欠^かと^とを^を常^{じやう}節^{せつ}の^の涙^{なみだ}ふ^ふく
 賣^うま^まぬ^ぬ報^{はつと}も^も志^しを^を一^{いっ}門^{もん}

色^{いろ}髪^{かみ}半^{はん}振^びり^り一^{いっ}ま^まよ^よ茶^{ちや}と^と成^{なり}
 便^{べん}一^{いっ}よ^よ夢^{ゆめ}の^のお^おあ^ある^る
 む^むふ^ふ志^しせ^せる^るの^のハ^ハ志^して^て未^み進^{しん}職^{しやく}
 お^おま^まハ^ハ樹^{じゆ}と^とく^くお^お音^ねな^なら^らう^う
 戒^{かい}壇^{だん}堂^{どう}さ^さき^きね^ね法^{はふ}令^{りやう}今^{いま}又^{また}月^{げつ}も^も入^い
 韃^た一^{いっ}本^{ぽん}志^し加^か笑^{わら}へ^へお^おお^お
 奪^はて^ての^のく^く心^{こゝろ}用^{もち}意^いよ^よ蓮^{れん}の^の版^{ばん}
 走^は子^こ女^{によ}の^の尻^{しり}や^や控^{ひか}と^とた

送^ウろく^ウ内^ウ々^ウ洞^ウを^ウみ^ウ志^ウ々^ウ望^ウん
何^ウも^ウ煙^ウも^ウ志^ウれ^ウと^ウ暮^ウる^ウめ
深^ウ者^ウハ^ウ半^ウさ^ウり^ウと^ウま^ウる^ウ苦^ウ勞^ウが^ウう
神^ウも^ウり^ウく^ウ里^ウ移^ウり^ウた^ウる^ウ
流^ウと^ウ如^ウと^ウ甘^ウ新^ウ山^ウへ^ウ福^ウて^ウむ^ウの^ウ橋^ウ
め^ウら^ウと^ウ後^ウま^ウり^ウハ^ウ龍^ウ頭^ウよ^ウ棹^ウ

歌仙

夏^ウへ^ウ引^ウ垂^ウか^ウり^ウ人^ウま^ウる^ウ麓^ウ 紋^ウ昔^ウ
松^ウと^ウ松^ウは^ウ樹^ウ小^ウま^ウる^ウ竹^ウ 婆^ウ束^ウ
け^ウし^ウ人^ウ飛^ウ去^ウ身^ウ小^ウか^ウる^ウ比^ウね^ウと^ウ 乙^ウ栗^ウ
細^ウの^ウ房^ウ好^ウと^ウ名^ウハ^ウ吸^ウひ^ウて^ウ線^ウ 青^ウ少^ウ
森^ウて^ウ活^ウも^ウ月^ウ夜^ウと^ウ守^ウむ^ウん^ウよ^ウき 婆^ウ束^ウ
秋^ウれ^ウす^ウこ^ウ丸^ウ魚^ウこ^ウくと^ウ蠅^ウ 執^ウ業^ウ

鶯^ウの尾を踏こぎて延く 紋苞

玄信^ニの入石船^{イシフネ}と青少 乙栗

尻目^{シラメ}と六むし^{ムシ}と鳥^{トリ}と花^{ハナ}と忙^{マシ} 青少

生^{ナマ}と柳^{ヤナギ}と河^{カハ}と片^{カタ}級^{カウ}名^ナ 婆東

斗^トの後^{ノチ}遠^{トホ}あまもろと長^{ナガ}閑^{クワン}なる 乙栗

去^ク風^{カゼ}を登^{ノボ}て走^{ハシ}於^オ宿^{ヤク}刻^{コク} 紋苞

ち花^{ハナ}の下^ノは似^ニ合^{アヒ}ぬ形^{カタチ}かあり 婆東

折^{オリ}きし杖^{ツエ}と草^{クサ}とよ 青少 乙栗

石^{イシ}具^グ屋^ヤへ出^デて綿^{ワタ}衣^イの嚙^{カミ}と成^{ナリ} 紋苞

急^{イサ}な恨^{ウラミ}とく藤^{フジ}又^{マタ}か新^{アタラ}る 乙栗

居^イ座^ザれ家^{イヘ}ふきく丸^{マル}く月^{ツキ}の晴^{ハレ} 青少

な^ナいよう^{ヨウ}淋^{シメ}し柳^{ヤナギ}れ^レ白^{シロ} 婆東

告^{ツク}新^{アタラ}鴨^{カモ}きくく鳥^{トリ}又^{マタ}秋^{アキ}もく 乙栗

由^ユとら^ラ親^{オヤ}して人^{ヒト}を^ヲ山^{ヤマ}崎^{サキ} 紋苞

整^{ツツ}大^{オホ}より^{ヨリ}の^ノ程^{ハジメ}葉^ハま^マり^リの^ノ出^デし 婆東

角^{ツノ}形^{カタチ}を^ヲ石^{イシ}と^ト青^{アヲ}少^シ 青少

一ツのうらみ順礼新く風呂を積タケ 紋苺

舞マヒ 幼くハせよ多タカと葉ハ知チを 乙栗

尾ビ 獲ウケ ちりも乃と廣ヒロきく通トウひ橋 青少

下界ゲへ近チカく山ヤマも笑ウツへり 婆束

五入イそくねくも景ケイのねやる月 乙栗

凧カガ 桶ツツ小腰コウサウのけてそもく 紋苺

雪ユキの日ヒハ浪ナミ花ハナハばくバク痛イタう橋 婆束

きくキク飛トビ御ミやうヤウ葉ハ持チつて解 青少

酒サケくさいかと投ナゲぐの面オモふき 紋苺

身ミ世セハちチたうけ世セよハ脆ハクく 乙栗

痴チくきぬ又マタとらるトラほくま乃ノ状 婆束

月ツキう縁縁て照チカ鏡カガミえくら目メ鑑カガミや 紋苺

枝エ乃ノハ横ヨコたきりのも花ハナささう 青少

水ミヅ半ナをさるサルこらたさう叶 乙栗

歌仙

去ふき抄燈馬の後にも九十川 北箕
 去を折ちたうち何あり後 婆東
 蝶と飛ゆと蝶くと飛つて 采輝
 こ福去山より魔く紙風 同来
 月あふみ樹くの姿ふぬを又也 婆東
 家あうこがし坂おろり繪 執筆

葉碗燒合そ毒物詔へたり 同来
 叶あうくくハ清き板橋 北箕
 乞聲ハ意男でハ形ふ拍を 采輝
 仙家よハ老つしした境も清 婆東
 照る燈より祢やあうせ給わらん
 ねとよまゝる小乃崎日
 加勢村自法屏風と歌志堅 同来
 雨休の節く丸山をさる

疎

磨^ニてハ東へそく行く冬^ニの月 北箕

金^ニ利^ル携^ル砂^ニよお^リしま^シて

女^ノハ花^ノの^ノ疾^ク走^ルふ^レれ^ル 婆^東

忘^レき果^クき^レ海^ノ舟^ノの^ノ流^レ連^ル

入^レ夜^ノ子^ノ又^レ分^テて^レ涼^シ生^ルの^ノ神^ノ憾^ニ 采^輝

苦^ク吟^ミむ^シく^ク首^ノ飾^ハ漏^ル

一^ニ度^ニ死^ニぬ^レ就^テ古^ノ巾^ヲ着^ル又^ニ十^年 同^来

ぬ^レき^レ者^ノの^ノ物^ヲ人^ヲを^レ砂^ニに^ス

ね^レハ^レ行^キ都^ノへ^ニ鳴^ル山^ノ乃^リ寺 北^箕

松^ノ二^日又^ニく^レ美^ノの^ノ園^ハの^ノ眺^ケ

長^ク陣^ノの^ノ路^ヲふ^ルと^レ盤^ノの^ノ趾^ニ 采^輝

鏡^ハお^ろし^テて^レあ^らむ^レ婦^ノ娘^ハ

扱^テ待^テふ^レ泣^クて^レ居^ルの^ノ身^ヲ脚^ノ磨^ル乳^ヲ 婆^東

妻^ノの^ノ去^リこ^トも^レ知^ラず^ニ山^ノ麓^ニ

と^レう^レさ^レね^グ今^ノも^レ忘^レき^レぬ^レ彼^ノ扱^テふ^レて 同^来

吹^クよ^ク来^ルと^レ泡^ノ風^ハふ^レは^レづ^ク

い川流ても新地ハ柳とつゝと高 北真

子孫長孫親音是の所住也

強くハ志すば小次意を川を 采輝

繪の繪ふ是つて三反モ陪臣の氣

何とのけよ移まば足おろは花れ不二 回来

んやとさふツバ蕩と咲りよ 婆束

歌仙

楳の葉もあつゝハ勢シタよ為葉の如 唐細

風よとよふらクききとありき 婆束

春笠ハ雨よ甲斐如く目ふタ元多 冲虹

絵の具洗へハちやととる四 唐細

かたろ男れタハ人の笑れタとめ 婆束

井の鏡あハ秋乃結ヒ目 冲虹

葉

背戸ウロのよかまのぬまの首とくは 唐綱

咽ノドの妻の成妻ナツメのこころ 婆束

粟アハの人の時トキのくき母ハハの人 沖虹

粒ツブをせよの冷ヒヤきさる菓子 唐綱

代ヨロに妻ウツの娘ムスメを常トコ念佛 婆束

涙ナミとえゆの早ハヤの所トコロ 沖虹

利腕キウデのぬくまのくろくクの金将キンシャウ桂馬 唐綱

うちウチの赤牛アカウシのくろくクの西サハ霸王ホウテン樹 婆束

又仙人堂サキヤンのキキニ先

横町の秋アキ横ヨコ楯タテて叩ウツク消ク 沖虹

乳チ小胞コハクと子コ乃ノおの青月 唐綱

一方ヒトカタの茶チャと華ハナて何ナニ花ハナを友 婆束

ちと違チガフなれと紙シの尾ビも強 沖虹

ハニを赤アカのめメのくまクマの赤アカき嫁ヨメの禮レ 唐綱

慇イシ勤キンよよの尻シのくまクマ 婆束

之味シ縮シヅてさサしシの布フを貢ウケ物 沖虹

為ナリせし積ツキの如ニく祖ソ師シ堂 唐綱

侍人の絶句 浴花乃塔 唐 倭東

骨ぬきと中 迹々 出る 鯨 仲虹

大學のどややくと 一書一部 唐 倭東

深てもさした 仲よぢく 帆 倭東

月きく 窓うく 神のよあま 仲虹

くらぬ 愛り 名ハ 猿と 唐 倭東

置れ 故の 御し 小あ 相さ 倭東

初し よ事 万ま ぬ板 唐 仲虹

組

呉服 又は として なる 能の 唐 倭東

二目の 肩より 録と ぬり 倭東

照天 とも 五 下三 里 仲虹

さく やめ ねる 所 唐 倭東

年毎の 練を 花小 呼く 仲虹

川 摺 揚し 舟よ 永 唐 執筆

歌仙独吟

五流命をハ心操清水ゆて其源
於深一ふとく一を後の一葉を信は
唯信回答一冊を附録して遠玉乃
門生とさとのあとの其世の電濫も
かうんふりを知りて予七一章をこふ

井の上小徳何れも相の花くみ

紫栢

白ハ涼一巻るり右あり

ふハ寶並へた玉よヤシ飛も如し

つことハぬをハ物ぬ

ふの唐く川節近た東乃月

去葉拾ひよハ及ハぬハ草

錦ツ差る中よ秋あまハ山の色

事ハぐぬハさハふハ爪ハおハ粉

深舟まハ蔭ハをハ幕ハ小裸ハ回ハ士

何ハのかれぬハ下ハ細ハハハ舞

色ハめハもハ舌ハ丸ハとハ解ハりハ進ハて

猿ハ紋ハはハ時ハ熟ハ字ハ忘れハる

木像を灰汁よ漬る懺悔の
鏡の穴くくえへ新極糸
冴る月をくくも知小地の風
情き念小片男泪あ
絵あうもとをれ一花の百つふ
被あさむく 羅志推子
抱志見あ叶ハ是又もくくく進我
態と致きく舞ハ去ニルリ

玉記寸武ハもの云り反隈義
仏檀のぬり鉄炮乃事
等控多あをたり友翅
味を吞こみユむ舞立
葉耀も知くぞつら牡丹咲
眉をくく目ハ固教さ
結ひゆを林よおくして考障帯
えくくくきひぬる鈴乃殻

漢教を難波て問へハ白拍子

常と又うりは名目も作

賀^ウ延ふ糸一と極む秋の雨

とえぬく糸よ半はぢり屋

回^ウふハ皆^ウの家^ウ店^ウり^ウ腰^ウ掛^ウて

お^ウま^ウち^ウ慰^ウむ^ウ他^ウ不^ウ境^ウ界^ウ

福^ウ乃^ウ重^ウた^ウ救^ウの花^ウ北^ウ山^ウ

子^ウ代^ウの^ウ苗^ウ代^ウ学^ウえ^ウる^ウ積^ウ

飛借問答

素老又布門述

○或藏屋敷の留とて格逸童何某又いそ

在^ウ世^ウの^ウ儒^ウ者^ウれ^ウ姓^ウ名^ウを^ウ取^ウり^ウ嘲^ウ弄^ウし^ウて^ウ教^ウ句^ウ

或^ウハ^ウ付^ウ句^ウな^ウら^ウに^ウ修^ウて^ウ具^ウせ^ウし^ウ飛^ウ士^ウの^ウう^ウら^ウう^ウ法^ウ

式^ウと^ウ志^ウぶ^ウら^ウ故^ウの^ウ積^ウ籍^ウと^ウい^ウべ^ウし^ウ唐^ウ土^ウの^ウ舞^ウ

宗^ウ儀^ウと^ウい^ウひ^ウし^ウ詩^ウ人^ウあり^ウ楽^ウ天^ウの^ウ風^ウを^ウ学^ウび^ウて

作^ウ意^ウり^ウし^ウ志^ウの^ウ好^ウみ^ウ禪^ウ者^ウ多^ウし^ウ此^ウの^ウ思^ウ致^ウを

詩^ウを^ウ作^ウる^ウ人^ウと^ウ笑^ウひ^ウ勢^ウ無^ウせ^ウう^ウ後^ウは^ウ長^ウく^ウて

國政を清り或は奉行頭命のよしを待はれ
形て捕らき首を切る市よさうたせらるるぞ

○予壯年乃以新宅乃會り出るる小或人
一頓の句よ といこと雪を雪ぬ夕照と何ぞ
執筆といこの字いふ事へ一同なる小を
のうさ色土番と半信といふ事らき一を今小
信えさく用ひ其まきう存門云といことい物
具製延と二川よおと中隅を續としま

物と名振へて出西軍中の死骸と置ふ具
あり所謂お故ハ死者れ儀あり物故持と
いふをそのこと略しと云の右をなれるし
む不吉の物なきば座ふよりとて表など
小い月控有へ

○なまるとのきごう人をおやるといへる付古
仕友の武士と君城さして御座形といふ
當時親方と書るり文字不當なり

○葉の柄はまきなり茶の柄は夏なり或はまき
葉さうらうとまきは出なり温くして用ひるべし
古人茶の葉を夏は用ひるるは葉をさうらうと
いふなり花のうきはいほり

○名物の花前よはまきと出は人ありまきなり
まよかきくじ地のまきも出なり
穀の向やすくまきと出はかきくのふねお
ゆよ花前加者の後ふり

○連袂古式の建法の式目也世ふ云は古式なり
新式の應安の式目也則今日用る所の式なり
古式と新式のつらつらと右古式はまき中絶
あしを兼裁連袂の音とまきんりさたり
後のまきと新式も京都清水寺において
古式の舎をそりて無りまきよよりしては
連袂とそりせりまきの柄は既修のあふ用な
るのかるを古式といふ名よよりて神心のまきは

小運(う)さう(う)ぬ(う)づ(う)き(う)ん(う)ふ(う)も(う)又(う)ら(う)づ(う)い(う)ま
お(う)づ(う)れ(う)ば(う)授(う)く(う)は(う)る(う)ま(う)べ(う)ー(う)む(う)き(う)あ(う)ま(う)ら
秘(う)変(う)な(う)き(う)い(う)ま(う)も(う)ふ(う)傳(う)え(う)が(う)ー(う)

○大(う)あ(う)り(う)ー(う)ま(う)ま(う)り(う)ー(う)玄(う)妙(う)切(う)或(う)は(う)け(う)る(う)あ(う)る(う)あ
と(う)え(う)な(う)ら(う)い(う)ぬ(う)ま(う)ふ(う)出(う)は(う)ら(う)い(う)へ(う)ど(う)も(う)大(う)肯(う)の(う)ま(う)い
却(う)と(う)秘(う)ん(う)の(う)ほ(う)い(う)か(う)れ(う)ら(う)い(う)ま(う)も(う)あ(う)れ(う)れ
秘(う)伝(う)と(う)ま(う)る(う)あ(う)る(う)れ(う)が(う)ま(う)解(う)と(う)り(う)ぬ(う)ま(う)ら(う)く(う)な(う)ら(う)
態(う)望(う)の(う)泥(う)士(う)密(う)あ(う)り(う)傳(う)授(う)と(う)ま(う)な(う)ら(う)ー(う)

○切(う)ま(う)な(う)ら(う)た(う)あ(う)ま(う)向(う)き(う)他(う)者(う)の(う)身(う)持(う)ハ(う)或(う)ハ(う)こ(う)ろ
ぎ(う)ま(う)き(う)と(う)ま(う)み(う)れ(う)現(う)在(う)の(う)て(う)な(う)ら(う)い(う)答(う)え(う)ら(う)先
現(う)在(う)の(う)て(う)と(う)ま(う)ら(う)一(う)向(う)て(う)ふ(う)は(う)と(う)ま(う)ら(う)ら(う)る(う)至
愚(う)の(う)詞(う)なり(う)あ(う)れ(う)ら(う)ハ(う)傳(う)せ(う)ら(う)ふ(う)た(う)ら(う)ら(う)る(う)ゆ(う)い
又(う)あ(う)ら(う)ぬ(う)き(う)被(う)と(う)ま(う)あ(う)ま(う)向(う)き(う)ま(う)ら(う)ら(う)ふ(う)少(う)と(う)切
ま(う)と(う)ま(う)ま(う)き(う)あ(う)ま(う)ら(う)ー(う)あ(う)ま(う)ら(う)ら(う)ら(う)私(う)の(う)こ(う)ら(う)後
切(う)ま(う)し(う)他(う)の(う)因(う)心(う)と(う)る(う)切(う)ま(う)ふ(う)あ(う)ら(う)ぬ(う)れ(う)神(う)の
ら(う)と(う)あ(う)ら(う)し(う)て(う)切(う)ま(う)な(う)ら(う)ら(う)と(う)相(う)と(う)い(う)わ(う)る(う)あ(う)る(う)

んなる故小名人の切字も亦是れ小なる後
 けりだ終より名所小あよりを志るべし
 先陰を貫あり確まば盲人の周折をいと
 つぶるがごとく又もさみれと云は下の事あり
 熟字よの文字をたゞし入るより或は
 諸人れ神小招行梅の花かくのこく他る
 とくいへる志るくは下は熟字ある句は皆は愛句
 申るべきは幾少不堪なるものなり

○ 經句れてとわ 小とわ 百讀小一句ありて
 句法も其増補書よ出ありといへると妙なり
 初ふのとききりよあはるは志うたよけ語を志る
 なる佐若割句法もよとらばして ちよとある
 世を花よはるふとてたゞとされば何の亦へも
 かりと忘者言刺をくらふこと流しはたよく
 ○ 菴青刻のころちぬく若あかり 釈教述懐
 小あはるは草庵も是よたねど

妻妾イカク共小人倫なり青洲の海はあはれべ
うらぶ個多とかけるとして人倫あり
かたしり勿論なり

○世と代といふ意遠よ故ふ去嫌も格ふこ
志の如ふ世の字若く梅よとれた執毫よ外はうれて
あうらば代乃ちまよまあよべいと句意の
ちもぬくいひるをさひる備ふ懐紙よまつけ
ぬるし是是非あられ或は末座よりさる合を

くう上望老人の句をあげざぬひかどとる
法外の量れといふへいさ積ひとへよ近年も
恙ふあうらる人文登報ふ座とる故とをねほ
ゆね一登の争論さゆくみる中よ食類乃
去嫌し終とりよた未練よおが由是候令い
下配ちうん学際赤貝 鷗かけらる衣柳
さねした西風甜瓜の後ひあよ市
あきくハ食類よらうさふり勿論なり

とよより生類極物もあらざればこれのみふ
かきくも半祈火類がいの去嫌せしる等
遠心のよりともらうと折角はあはるる向を
見た合ふしとすなむしを替て向をいしあ
やどとる事一他者のかのを先小のたむ
一聖れ坊といふあつし能くおひてさ後
文章短よあるべたことなり

○いれの心より旅懐篇述懐 無常

哀傷の去嫌をゆはとる能事なし
此よりふんはよて替り出さば不思議乃事
どもいひひま争論やむまどた小一向小
辨えぬし於経日経の二助ともたがゆれ

能備素光又

卷一終



11+

葉

六

